

災害に負けない、 農業の未来を信じる

もりやま園株式会社 代表取締役 森山聡彦さん

農業の現実を
「見える化」することから
はじめました

目の前の惨状に言葉が失った。リンゴの木は根元から倒れ、収穫間近の赤い果実は一つ残らず落ちていた。1991年9月に東北地方を襲った台風19号。18歳の森山さんは自然の猛威に打ちのめされながらも、疑問が芽生えていた。災害は農家の宿命なのか…。黙って耐えるしかないのか…。

大学卒業後、140年続いたリンゴ農家の4代目を継ぐことに迷いはなかった。青森県弘前市、津軽富士と呼ばれる岩木山を望む8.7ヘクタールの農園にはリンゴの木1,800本が植えられている。休みなく続く農作業の段取りは父の頭の中にしかなく、「見える化」が最初の挑戦だった。



1本1本にタグをつけ、すべての作業をデータ化すると、厳しい現実が見えてきた。「がくぜんとなりました。労働が生む価値は最低賃金以下。利益を出す仕組みがなければ農業は持続できない」。状態の良い実だけを残し、その他の小さな実を間引く摘果(てきか)作業では、なんと9割の未熟果実が廃棄される。年間3,000時間に及ぶ労働がそこに費やされていたこともデータに教えられた。

“ロス(損失)を付加価値に転換する”、それが第2の挑戦となった。仏ノルマンディー地方のリンゴ農園を視察した時のことだ。小さなリンゴを加工したシードル(リンゴ酒)の味いに感動し、摘果リンゴの可能性を確信した。間引いて、その多くが廃棄される摘果リンゴを商品化する。加工栽培ならば台風などの自然リスクに負けない。

だが、道は険しかった。試行錯誤を繰り返しながら、最適な栽培方法を確立するのに5年、さまざまな酵母をかけ合わせ理想のものに出会うまでに、さらに3年の長い歳月がかかった。そして2017年、ついに発売された商品は「テキカカ(摘果果)シードル」と名付けられ、2019年度の「ジャパン・シードル・アワード」では大賞に輝いた。発想の転換でマイナスをプラスに変えた瞬間だった。

“農業の未来を信じる”、18歳の疑問から始まった挑戦に終わりはない。



農業の新たな価値を象徴する「テキカカシードル」。

摘果されたリンゴ。これまでは廃棄されていたが、発想の転換でシードルに生まれ変わる。



もりやま園株式会社
〒036-8253 青森県弘前市緑ヶ丘1丁目10-4 もりやま園テキカカシードル工場・本社
電話 0172-78-3395 ホームページ <http://www.moriyamaen.jp/>

三沢明彦(みさわ あきひこ)

1956年生まれ、早稲田大学政治経済学部卒業後、1979年読売新聞社入社。社会部記者として活躍し、北海道支社編集部長、写真部長、編集局次長を歴任。その後、旅行読売出版社常務取締役編集長、福岡放送常務取締役(報道、制作担当)、静岡第一テレビ常務取締役(編成、報道、制作担当)、現在は静岡第一テレビ顧問。